



大月市出身で、異色な斯界で著名な人に、日本甲冑・武具研究保存会会長藤本巖がいる。  
藤本巖は、大正五年十二月二十七日、父義盛・母幹尾の長男として、大月市猿橋町藤崎に生まれる。

藤本家は、甲斐源氏小笠原長清の十男藤崎十郎源行長の後裔で、屋号を「藤崎の大屋」と言い藤本巖は三十五代の末裔です。

「甲斐国志人物部第四、小笠原長清の項に」

「行長 十男 東鑑正嘉中の射手に小笠原十郎と見ユ。又藤崎十郎と称ス。法名光念、藤崎は都留郡の地名なり。」

浄土真宗福泉寺の坊守の記述によると、

①藤崎の大屋では、その墓地に古い五輪塔があり、太祖先光念の墓と刻まれ、代々行長の子孫と語り伝えられて来た。

②長篠の合戦に郎党と共に従軍したと言う文書が残り、甲斐国で武田氏が栄えていた頃までは、土着豪族としてかなりの勢力があった。

③度々の大火のあと、現在の小田の中央平地に移り、土地の大名主として、経済的にも文化的にも、地域のリーダーであったと思われる。

④天和三年、芭蕉が谷村流寓の途次、藤本家にて土地の俳人達と俳諧を愉しんだ。

『月刊 武道』二〇〇七年六月特別増大号「顔」で、藤本巖を次ぎのように紹介している。

■甲冑・武具の研究を始め

たきっかけは？

「私は、甲斐源氏小笠原長清の十男藤崎十郎源行長三十五代の末裔で、長男でしたので、初節句のお祝いに武者絵の掛け軸を二十幅余頂きました。前九年役の源義家、源義経鴨越、楠木正成など、幼い時から祖母にいろいろ武勇伝や逸話を聞かされて育ち、全部、空で覚えしました。それで甲冑や武具が好きになり、いつの間にかこの道に入ったというわけです。」

「昭和三十一年に日本甲冑武具保存会が結成されて、四十二年に、社団法人として国から認可を得た。初代会長は赤城宗徳先生で日本武道館の理事長と言う縁で、事務所は日本武道館に置いてあります。初めの頃は、めいめい自前の鎧や具足を持参して、鎌倉、室町、江戸時代の甲冑が入り乱れて、ちくはくととなり、進行台本もなかったもので、手順を忘れたり、いろいろなことがありました。」

■日本甲冑武具研究保存会とは？

「昭和三十一年に日本甲冑武具保存会が結成されて、四十二年に、社団法人として国から認可を得た。初代会長は赤城宗徳先生で日本武道館の理事長と言う縁で、事務所は日本武道館に置いてあります。初めの頃は、めいめい自前の鎧や具足を持参して、鎌倉、室町、江戸時代の甲冑が入り乱れて、ちくはくととなり、進行台本もなかったもので、手順を忘れたり、いろいろなことがありました。」

また 国の要請を受けて、海外で展覧会を開催し、ベルギーのユーロパリア89での大名展について、名譽総裁となられた天皇陛下の茶餐会に招かれ、奏上の光栄に浴し、励ましのお言葉を頂戴する榮譽を受けたことは生涯忘れられません」

■甲冑・武具研究の面白さ

保存の苦心談は？

「現在、会では、年数回、甲冑や武具の審査を行っています。昔、武道館で審査会を実施した時、全国から二百点以上の甲冑が持ちこまれ、二日ばかりとなった。

審査は、大変ですが非常に勉強になる。例えば「赤革威大鎧」と言う平安時代の貴重な鎧が岡山県で発見され、後に国宝に指定され、こう言う国宝・重文の発掘は何よりの成果でした。普通、絹糸威の古い鎧は、風化して、手を触れるだけでバラバラになってしまいます。つまり、甲冑をただしまっておくだけでは傷んでしまうため、貴重な文化遺産の保存には、甲冑師の技術を絶やさぬよう、修復や復元の機会を作ってあげることが重要です。今後は、文化財の保存と併せ、技術の伝承を継続的に創出する仕組み作りが必要です。」

■甲冑・武具に込められた武士の美意識とは？

「本来、甲冑・武具は、飾り物でなく、生死を分かち戦場で武士が身に付けて戦うための実用品であり、死に装束でもありました。そこには日本人の知恵が凝縮しており、鉄や革、繊維などの素材が身体になじむように組み合わされて出来ていながら、武士の華といわれる見事な造型や色彩、装飾など、魅力に満ちあふれています。」

■後進へのメッセージと今後の抱負は？

「私は、これまで、四、八七一点の甲冑の審査をやってきました。とにかく、実際に場数を踏んで見て勉強する事が一番です。まずは、たくさん鎧や兜、武具を見て、好きになって欲しいのです。愛着が湧けば勉強するようになり、甲冑・武具への理解も一層深まります。そして展覧会などでもっと若い人にその魅力を知ってもらい、甲冑・武具の理解者を一人でも多く増やしていきたいと思えます。」

■「山本勘介の謎を解く」

渡邊勝正著に序文

藤本巖は又武田家旧恩会副会長として、山本勘介の出自について、安芸武田家との関連を研究発表された上記の著書に序文を寄せ、

「歴史上、史家により架空の人物とされて来た勘介が、『市川文書』の発見により、今や実在の人物として『NHK大河ドラマ』でも放映され、出生地は駿河か？三河か？諸説が在る。

今回渡邊勝正氏の研究の結果、讃岐で生れ、安芸武田を滅した大内軍に属した勘介故、一門甲斐武田で出自を隠し通した。長州の毛利文書「國関録」(家臣録)に山本勘介の名がのこされ、子孫が判明している。」

これは勘介像の新分野を切り開いたものと言える。

参考文献  
「武道六月特別増大号」  
「郡内研究第4号」  
「山本勘介の謎を解く」  
執筆 井上文次郎

「大月人物伝」発刊のお知らせ

いつも「住まいル新聞」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌にて平成18年5月より掲載しました「大月人物伝」を「心に舞う」シリーズ第五回目として、製本発刊させていただきます。

ご希望の方は先着500名様に無料進呈を致しますので下記までお申し込み下さい。  
TEL0554-22-2500 FAX 0554-22-5234